

KONAN UNIVERSITY

理科教員養成のための甲南大の取り組み

著者	林 慶一
雑誌名	教職教育センター年報
巻	2006年度
ページ	26-27
発行年	2007-03-31
URL	http://doi.org/10.14990/00003124

理科教員養成のための甲南大学の取り組み

理工学部教授 林 慶一

理工学部における理科の教職を担当しております林です。最初に自己紹介をしますと、理学部・理学系大学院で地質学・古生物学を専攻した後、東京都立の高等学校で教職に就き、平均的な学力の全日制の生徒と、併設の多様な学力・意欲の定時制の生徒を教えるという経験をした後、東京学芸大学の附属高等学校に移り、ここでは同じ大学の附属小・中学校の先生方との校種を超えた共同研究なども経験して、合計19年間の教員生活を経て、地学及び教職担当として甲南大学の理工学部にて勤めて6年目になります。理科教育関係の4学会に所属して活動しておりますが、地学教育学会では編集委員長を5年間務めました。また、現行の高等学校学習指導要領の作成や教科書の執筆にも関わってきました。

本学の理科の教職課程の特徴は、一人の教員ではなく、理科の各分野の科学とその教育に詳しい専門家が複数で担当しているところにあります。例えば教科教育法(理科)は、物理教育、化学教育、生物教育、地学教育のそれぞれの分野において、教職経験や現職教育などの教育上の見識と、自然科学の研究能力を併せ持った教員4名で担当しております。これらの教員が、物理・化学・生物、地学のそれぞれの立場から行う教科教育法Ⅰの講義を通して、理科教育全体にわたって共通して求められる教員としての能力や態度と、物理・化学・生物・地学の各領域における固有の自然の見方や考え方、それによって求められる領域固有の能力や態度を具体的に教えています。また、それらを単なる知識から使える能力に高めるために、教科教育法Ⅱでは模擬授業を全員に行わせて、個々の学生の具体的な問題点を洗い出して指導を行うと共に、学生間での議論を通して教師や教育の様々な問題点に自ら気づき、それを糧として自分を改善する自己教育力を付けるようにしています。

また、教育学部とは異なる理工系出身の教員が教育で貢献できるのは、子供を実際の自然の事象に対峙させて、自然を探究し、科学的に理解するという過程を、自己の科学探究の経験を基盤にして、しっかりと教えることができることではないかと考えております。このため、理科において重要な観察・実験の能力を高めるべく、物・化・生・地の各基礎実験は理工学部の充実した設備と豊富なスタッフを生かして、高いレベルの教育を行っております。例えば、私の担当する地学実験については、専任の私以外に地球物理、気象、天文、地質、岩石の5名の非常勤の教員が担当し、通常の時間割の実験の他に土日を利用した野外地質調査や天体観測を郊外の附属施設を利用して行っており、他大学にはほとんど見られないレベルでの密度の濃い教育を行っております。

ただ、一方で現実の学生の意識には、教員免許を取得することと教員になる意志の間に大きな開きのある者も少なくないため、それらの学生の意欲を高めるための効果的な解決策がなくて、苦勞している現実もあります。甘い意志は、模擬授業の準備不足にはっきりと結果が出てきますので、現状で

はこのときに厳しく指導しています。特に、欠席はもちろん、教員が遅刻や早退をすることが、実際の学校現場では子供や同僚にどれだけの迷惑をかけることになるかを強く説明し、授業に完全に出席することを単位を出す前提条件としています。数十名の教育実習生を学校現場で指導してきた自分自身の経験からも、大学が意欲と能力をきちんと持った学生にして実習校に送り出す責任を何よりも強く感じております。

センターの設立を機会に、皆様からの貴重なご意見やアドバイスをいただいて改善を続けたいと思いますので、忌憚のないご意見をお寄せいただきますようお願いいたします。

・ 2006年度教職担当科目
教科教育法Ⅰ・Ⅱ（理科）
教育実習Ⅰ・Ⅱ（理科）